

Title	一九〇〇年前後のアドルフ・フォン・ハルナックとマックス・ヴェーバー
Author(s)	深井, 智朗
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.49, 2011.1 : 131-159
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2957
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

一九〇〇年前後のアドルフ・フォン・ハルナックと

マックス・ヴェーバー

深井 智朗

問題設定

——ハルナックとヴェーバーの関係は、アンシュタルト化したドイツ・ルター派と禁欲的プロテスタンティズムとの対立として図式化されるべきなのか？

マックス・ヴェーバーが一九〇四年から五年にかけて『社会科学・社会政策雑誌』に掲載し、後にさまざまな改訂が加えられ『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』⁽¹⁾として知られるようになった論文の最初の構想が完成しつつあった頃、彼はベルリン大学神学部の教授で、カイザー・ヴィルヘルム協会の総裁、帝国議会図書館長を兼任し、正枢密顧問官 (Wirklicher Geheimrat) としてヴィルヘルム二世の側近のひとりであった神学者アドルフ・フォン・ハルナックに何度も手紙を送り、⁽²⁾ハルナックのプロテスタンティズム理解、とりわけドイツ・ルター派の政治的解釈についての意見を述べ、さらにヴェーバーの著作構想についてハルナックの立場からの意見を引き出そうとした。⁽³⁾その様子の一部はヴォルフガング・J・モムゼンによって引用されて以来有名になったヴェーバーとハルナックとの往復書簡に

よって知られている。ヴェーバーは次のようにハルナックに書き送ったのである。

私は、ルター派はその歴史的諸相において、また私自身にとつても恐ろしい戦慄するものであるということとを否定することはできません。……その理念的形態、及びその将来に関する希望においてさえ、私はそれがどの程度の活力をドイツ人に提供できるのか、ということに關してはまったく定かではありません。主観的なことですが、それは困難な、また悲劇的な状況です。ドイツ人は誰もゼクテ主義者、つまりクエーカーやバプテストになることはできません。私たちはみな……非倫理的、非宗教的な諸価値にのつとつて、制度的教会中心主義の優越性を率直に認める者たちなのです。われわれの国民が厳格な禁欲主義の学校を一度も、どのような形態でも経験してこなかったということは、私がわれわれの国民について、同様に私自身についても、憎むべきだと思ふことの全ての源泉になつていてと感じているのです。⁽⁴⁾

両者の交流についてはこの書簡がしばしば引用されるので、アンシュタルト化したドイツ・ルター派の代表者であるハルナックとアングロ・サクソン鼻根で、アメリカ旅行から戻りますますアメリカに熱狂し、⁽⁵⁾ アスケーゼ的なゼクテ宗教を支持するヴェーバーの対立という図式によつて、両者があたかも政治的にも、思想的にも対立關係にあつたかのような説明がしばしば見出されている。しかし両者の交流のはじまりはもちろんこの手紙以前に遡り、両者が政治的、思想的に同じ敵と戦つていたことについてはあまり指摘されていない。その原因は、この時代の思想史研究が社会学や神学にそれぞれ細分化されてしまい、今日的な意味での専門領域を越境する知的交流史や影響史には無関心であることから来ているのであらう。さらにはこの書簡に限つてみても、両者の間には、この他にもヴェーバーの著作全集に収録された書簡だけではなく、実はなお未整理の書簡がハルナックの側に保存されている。⁽⁶⁾ その意味では両者の關係について

の研究には資料的な制約もつきまとい、十分な研究がなされているとは言いがたい状況にある。

ハルナックの側の資料の整理や公開が遅れている理由は、外的・政治的にはハルナックの資料の多くが旧東ドイツの側で保存されることになったことがあげられるが、⁽⁷⁾ 内的・思想的問題としては、ハルナックが彼の次の世代に登場した神学的アヴァンギャルドたちの一時的な成功とその中心的な存在であったカール・バルトによる思想的ラベリングによって完全に葬り去られてしまったことが主たる理由であろう。⁽⁸⁾

しかし既に述べた通りヴェーバーとハルナックは、個人的にも思想的にも、また当時のドイツ・ルター派の教会制度や教会内部の紛争や福音主義社会協議会の運営をめぐる深いつながりがある。⁽⁹⁾ 両者の知的交流史についてはヴェーバー研究の側からはいくつかの研究が見出されるのであるが、肝心のハルナック研究の側ではほとんど手付かずのままであることは大きな問題である。たとえばヴェーバーとエルンスト・トレルチ、フリードリヒ・ナウマン、オットー・バウムガルテン、そしてマルティン・ラーデとの関係などについては今日かなり詳細な研究を見出すことができ、書簡をはじめ関係資料の整理もほぼ終わっているが、ハルナックとヴェーバーとの関係についての研究は驚くほど少ないし、誤った情報、特に神学的アヴァンギャルドたちによって作り上げられたハルナック像に依存した見解が事実であるかのように、ひとり歩きし、通用している。前世紀の変わり目の頃からドイツではそのような研究は見られなくなったが、日本の神学界ではそのようなハルナック像がなおも実しやかに語られていることがある。

両者の関係についての研究はガンゴルフ・ヒュービンガーが指摘するように、まさに「ドイツ統一後に実際には可能になったのであり」、カール・バルトによつてその思想が葬り去られる際に、何度も彼によつて書き直された念入りな弔辞の言葉から解放されなければならない。実際ヴォルフガング・トゥリルハースが言うように、前世代へのコンプレックスか、同僚へのあてつけか、講義の受講者数や演習の参加者数に、あるいはカリキュラムの編成や教室の場所今まで異常にこだわり、自らの成功を誇り、他大学の人事にまで介入し、自らの立場に批判的な若い神学者たちの就職を

妨害する手紙まで出すカール・バルトが書くハルナツクに対する呪縛の言葉は、印象的で、政治的なものである。そのためにハルナツク自身を直接読み、確認する前に、多くの研究者がバルトの呪術に惑わされ、先入観を持つようになった。ハルナツクはバルトによつてその神学的意義を消し去られてしまったのである。このような状況の中で出来上がったハルナツク像でヴェーバーとの関係を考えると大きな誤解が生じてしまうことになるし、実際には特にドイツの一九世紀の神学的状況が理解されていないわが国のような状況においては、既に生じてしまっている。

たとえば既述の書簡がしばしば、ドイツ・ルター派を代表する神学者ハルナツクに対する、ヴェーバーの禁欲的プロテスタンティズム、あるいはゼクテ型のプロテスタンティズム、アングロサクソン世界に展開したプロテスタンティズムの擁護であるかのように読まれているが、果たしてそのような単純な図式で、この手紙を読むことができるのだろうか。モムゼンが引用した部分だけから想像して、このような図式を両者の関係に読み込むことが許されるのだろうか。ヴェーバーは本当にハルナツクにドイツ・ルター派を代表させようとしたのか。またハルナツク自身そのような立場にあったのだろうか。あるいはまたヴェーバーは本当にヴィルヘルム帝政期のドイツ人に「厳格な禁欲主義の学校」を経験させることで、その時代の問題を解決できると考えていたのであるか。そのような見方は複雑な事実についての単純化という誤りではないのか。そもそもこの手紙はなぜ書かれたのか。

実はそれらの問いへの答えは、今日なお未公開のハルナツクの膨大な資料を見なくても、ハルナツクの著作を少しでも読んでさえいれば、比較的容易に理解することができはすである。それ故に、本論ではこのような状況をいくらでも解消するために、あの手紙が書かれた一九〇〇年前後のヴェーバーとハルナツクとの関係を、既に公にされているハルナツクの著作と、近年ようやく整理、公開されはじめたハルナツクの側の資料の範囲内で検討してみたい。

1. 一九〇五／〇六年の書簡の背景

既に述べた通り、マックス・ヴェーバーとアドルフ・フォン・ハルナックの知的・政治的な交流についての研究は今日十分になされているとは言えない⁽¹⁰⁾。そのひとつの原因は両者の間で確認されている書簡が全て公開されていないこと（それぞれ保存している図書館や資料室で見ることにはできるが）にある。第二には、ヴェーバーに比べて、ハルナックの政治的発言を含む雑誌・新聞の論文、官報の記事が十分に整理されていないので、ハルナックの政治的な立場についての研究や言及は、ハルナックを批判する立場の者たちによるハルナックに対するきわめて感情的で、彼らの政治的な立場からなされたラベリングのよるものに依存してきたという点にある。ハルナックはヴィルヘルム二世の時代の正枢密顧問官のひとりとして、ドイツの中央の政策の只中におり、大学やサロン、過激な出版社や新聞社、各ラントの複雑なルター派の教会政治と結びついていただけの神学的アヴァンギャルドたちとはまったく違った立場で神学をし、また政治の問題と取り組んでいた。彼の政策に関する評論、また特に文化政策や国際関係についての論評は部分的に、しかも一握りの専門家にしか知られていない。多くの場合には神学的アヴァンギャルドたちの一方的な超現実的な批判に依存してハルナック像が作り出されたのである。それ故に両者の知的・政治的な交流についての精神史的研究は、今後資料の整理や公開を待たねばならない面がある。

それでは既に言及した、あの一九〇五年／六年の往復書簡についてはどうであろうか。実はこの書簡の文章が生み出された *Sitz im Leben* はそれほど複雑なものではない。むしろ明瞭なのである。この手紙が書かれた背景はヴィルヘルム帝政期におけるハルナックの政治的な立場を正確に知り、少しでもハルナックの基本的な著作を読んでいる者にはす

ぐに理解できる。

両者の往復書簡は一九〇五年の正月から一九〇六年にかけての間に交されたもので、両者の伝記的な記述からも分かる通り、ヴェーバーにとつては、あの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』をまとめた時期であり、⁽¹¹⁾その頃ヴェーバーもハルナックもセイント・ルイスを中心にはじめてのアメリカ旅行を経験している。⁽¹²⁾

ハルナック研究の側からすると、この時既にドイツでもっとも知られた政治家であり、ルター派リベラル・ナシヨナリストの神学者であつた正枢密顧問官アドフル・フォン・ハルナックは、その名を学問の世界で不動のものとした名著『キリスト教の本質』（一九〇〇年）を出版し、それは毎年重版を続け、一九〇五年には六万部に達していた。さらには外国語への翻訳が開始され、一九〇五年には英語、フランス語、日本語、イタリア語、オランダ語、ノルウェー語、デンマーク語、スウェーデン語、スペイン語訳が完成していた。

実はあのモムゼンに引用されて以来有名になつたヴェーバーからハルナックへの手紙はモムゼンによつて何の文脈も説明されずに引用されているが、以前にハルナック自身から贈られたこの『キリスト教の本質』をヴェーバーが読んだことが前提になつてゐることは明らかである。おそらく一九〇五年にこの書物の総計出版数六万部超えの祝宴が開かれたのだが、ヴェーバーもその招待状を受け取つたことに起因する手紙であろう。モムゼン自身はそのことについては何も述べていないが、実はこの著作こそがあの手紙を理解するために重要な意味を持つてゐるし、ハルナックが『キリスト教の本質』で提示したプロテスタント理解を知ることなしにはヴェーバーの発言の意図は正しく理解され得ないであろう。

では、なぜヴェーバーはハルナックにこのような手紙を送つたのであろうか。この往復書簡は漠然とドイツ・ルター派を批判することではなく、あるいはアンシユタルト化したルター派に対してゼクテを肯定するという議論であるよりも、はつきりとした議論のためのテキストが指定されているのである。それはどのようなものであつたのか。

この書物の中で、ハルナックは、キリスト教の本質を理解するために、キリスト教の純粋な出発点であるイエスの神意識に遡ろうとしている。ところがキリスト教の歴史的展開の最初の時代にそのイエスの教えのギリシア化が起こったことを指摘し、イエスの教えと「ギリシア化」されたキリスト教との断絶を指摘しているのである。それ故にキリスト教の歴史的発展は誤った展開の帰結ということになる。このような見方はアルブレヒト・リツチュルとその学派のキリスト教理解に共通しているものである。

しかしハルナックによれば、このような誤ったキリスト教の展開を修正したのがプロテスタンティズムと呼ばれるようになったドイツの宗教改革ということになる。そしてさらに、イエスの教えをもっとも典型的に受け止め、このような認識によつてイエスの教えから導き出されるもつとも高次の宗教的な形態を提示したのがドイツ・プロテスタンティズムということになる。そのことは宗教改革が試みた宗教的な源泉への回帰によつて獲得されたのだと彼は言う。この宗教改革の態度は、源泉に遡るということによつて、キリスト教宗教の歴史的な発展を相対化することができたのである。キリスト者個人を宗教的伝統から解放し、自立させ、責任ある態度を身につけさせることになったと言うのである。その意味でハルナックはプロテスタンティズム、とりわけキリスト者の自由を明らかにしたルター派こそはキリスト教のもつとも成熟した形態であると考えたのである。

しかしこの後者の議論、すなわちキリスト教の誤った展開を修正したのがドイツ・プロテスタンティズムであるという解釈は、後に詳しく述べる二つの理由からして、歴史研究の成果であるよりは、彼の政治的立場の表明である。この議論の背後にあるのは、ひとつはヴィルヘルム帝政期のドイツ・ルター派のナショナリズムであり、もうひとつはハルナック自身の「逆立ちしたナショナリズム」である。つまりハルナックは、イエスの純粋な福音を歴史的に取り出すことで「キリスト教の本質」を規定するという作業と、その現代的な意義の確認、さらにそれをドイツ・ルター派と結びつけるという政治神学的な操作とを同時に行つたのである。それ故にハルナックは次のように述べている。「宗教改革

は、単に一一世紀以前、あるいは四世紀、二世紀以前に遡っただけではなく、実にキリスト教の起源にまで遡ったのである。さらにそれは、無意識的に、既に使徒時代に成立した形式をさえ変更ないしは、廃止してしまったのである⁽¹³⁾。

プロテスタンティズムがイエスの福音、あるいは宣教の本質を回復したという主張それ自体は新しいものではなく、またハルナツクの独占的な主張でもない。しかしハルナツクがこのプロテスタンティズムについて論じる中で、次のように述べる時、問題は神学的問題を越えて政治化する。すなわちハルナツクは次のように述べるのである。そしてこの文章を読む時に、ヴェーバーがハルナツクにあの最初に取り上げた手紙を書いた理由を理解することができるであろう。

人はしばしば、宗教改革は果たしてドイツ精神の働きであるか、またいかなる程度までそうであるのか、と尋ねる。私はここでこの複雑な問題について立ち入って考えることはできないが、ルターの決定的な宗教体験はドイツの国民性とは無関係であるが、しかし彼が国民に与えた積極的、消極的影響からすれば、彼こそがドイツ人であることを示していることは確かである。ルターはドイツ人で、彼の歴史はドイツ史に他ならない。ドイツ人が彼らに伝えられた宗教を真に自己のものたらしめんと一三世紀以後努力した時から、彼らは宗教改革の備えをしていたのである。それ故に人々が、東方的キリスト教をギリシア的と名づけ、中世的西欧ラテン民族のキリスト教をローマ的と名づけるのなら、人々は同じくプロテスタントのキリスト教をゲルマン的と名づけることができるであろう。たとえカルヴァンがフランス人であつたとしても、この事実を動かすことはできない。なぜならフランス人カルヴァンはルターの弟子であり、ルターはラテン民族だけではなく、イングランドやスコットランド、そしてオランダにも持続的な影響を与え続けているのである。ドイツ人は、宗教改革によって、一般教会史にひとつの段階をもたらしたのである。ドイツ人にとっては他

国民におけるように重要な理想とはならなかった禁欲主義（アスケゼ）からの転回と、外的な権威としての宗教に対する反抗とは、パウロ的な福音からだけではなく、同じようにドイツ精神からも証明することができる。⁽¹⁴⁾

ヴェーバーがハルナツクのドイツ・プロテスタンティズムについてのきわめて政治的な解釈であるこの引用文章の最後の文章をふまえて、あの手紙を書いていることは一目瞭然である。つまりハルナツクはルターの宗教改革をヨーロッパの近代史に新しい転換をもたらしたものとして理解し、ドイツ精神とフランス、イングランド、スコットランド、オランダといういわば狭義の「西欧」との違いを明らかにし、その上で、イエスの福音の回復をドイツ精神から説明したのである。その時にハルナツクが用いたのがドイツ・ルター派とキリスト教の禁欲主義的展開との対比という構図であつた。ヴェーバーがハルナツクに手紙で問い合わせていることはこの図式の政治的妥当性の問題なのである。

さらにハルナツクは、この時代新しく生み出された帝国のナショナル・アイデンティティーの形成のためにマルティン・ルターと彼の『キリスト者の「自由」』がどのような意味を持ち得るか、慎重に政治的、神学的判断を試み、次のような「政治神学的」な命題を生み出したのである。すなわち「一七世紀のピューリタニズムや一八世紀のフランス革命よりも早い一六世紀のルターの宗教改革における近代的『自由』の発見」という命題があつた『キリスト教の本質』の背景には隠されているのである。そしてそれがこの時代の神学界における歴史学的ルター研究の活性化であるルター・ルネッサンスにおけるルターの神学的テキストの復権の政治的コンテキストである。ヴェーバーはこのようなハルナツクの神学的ナショナルリズムに敏感であつた。これがあの手紙の背景にある思想的テキストと社会的コンテキストなのである。

ところで事情はそれほど単純ではない。ヴェーバーはハルナツク自身の神学的ナショナルリズムを単純に批判したので

はないからである。ヴェーバーがあの手紙の中でハルナックを批判しているのは、彼の文面に現れた表面上の政治神学的ナシヨナリズムだけではないのである。ヴェーバーが批判しているのは、むしろハルナックの「逆立ちしたナシヨナリズム」、「振れ曲がったナシヨナリズム」の方なのである。つまりヴェーバーはハルナックをドイツ・ルター派の代表者に仕立て上げようとはしていないのである。むしろヴェーバーは、ハルナックに、彼自身のリベラル・ナシヨナリストとしての立場とドイツ・ルター派の保守派のナシヨナリズムとの違いを明確にしたほうがよいと勧めているのである。そのことを理解しないとあの手紙は正反対に読まれてしまうことになる。そうであるなら、次にハルナックの『キリスト教の本質』におけるドイツ・ルター派の解釈、またそのようなプロテスタンティズム論を展開したハルナックの政治的な立場について明らかにしてみなければならないであろう。

2. ドルパットからやってきたアドルフ・ハルナックがドイツの政治の中枢にまで

駆け上り、アドルフ・フォン・ハルナックになるということの意味

アドルフ・ハルナックは、一八五一年五月一七日にドイツの教会史家テオドシウス・ハルナックを父に、また法学者グスタフ・エーヴェルスの娘マリーを母にドルパットに生まれている。⁽¹⁷⁾このドルパットは今日のエストニア共和国のタルトゥであり、ハルナックはこの母を通してリボニアの貴族の世界と結びつき、他方でプロイセンの政治的権力とロシア文化との間の葛藤という難しい政治的情況の中で育った。それ故に彼は一方でプロイセンのものへの反発と同時に複雑な憧れを持ち、他方で家ではドイツ語の他にロシア語を使いこなすという国際政治の只中で育った。⁽¹⁸⁾

ハルナックの教会史家としての仕事は多岐にわたったが、とりわけ古代教会の研究においては多くの業績を残し

た。彼の研究はグノーシス主義の研究に始まり、マルキオンの研究に終わったが、その間に有名な『教理史教本』（一八八五〜八九年）、『古代キリスト教文学史』（一八九三〜一九〇四年）、『初期三世紀におけるキリスト教の伝道と伝播』（一九〇二年）等の大部の著作を発表している⁽¹⁹⁾。

ハルナツクの生涯は日本で考える神学者のイメージと大きく異なっている。もちろん彼の活躍の舞台の中心はベルリン大学神学部であり、「類まれな偉大な教会史家」⁽²⁰⁾であり、「他の追従を許さぬ学問的エリート」⁽²¹⁾であり、「資料の扱いの巧みさと厳密さにおいて飛びぬけた力量を持った歴史家」⁽²²⁾だったが、同時に彼は皇帝の正枢密顧問官であり、王立図書館の館長であり、カイザー・ヴィルヘルム協会（現在のマックス・プランク研究所の前進）の初代の総裁でもあった⁽²⁴⁾。またハルナツクはこの時代の文教行政と深く関わり、皇帝の理想とする臣民教育の確立のために、とりわけ今日「教養市民層」と呼ばれるようになったドイツの知的階層の純粹再生産のプログラムを構築しつつあった。

ハルナツクは既に述べた通り、ドイツのプロイセンの出身ではない。また彼はルター派であったが、プロイセンのルター派教会との関係は希薄で、当時の周辺国家、エストニアのロシア語を母国語とする、ルター派教会内ではいわば傍流の出身であった。このことはハルナツクが神学者としてヴィルヘルム帝政期に生きて行くために決して小さな問題ではなかった。というのはこの時代のルター派主流派のドイツ・ナシヨナリズムはハルナツクのような経歴の神学者を評価することができないような体質であり、人事やルター解釈においてハルナツクはその優秀な学問的な業績に比例する評価を得ることはできなかった。

それ故に神学者ハルナツクの支持母体はプロイセンの政治的主流派となったルター派ではなく、彼の学問的な業績を宗派政治から切り離して評価することができる大学であり、新しく生まれたライヒにおける皇帝による中央集権的な宗教政策に異議をとない、各ラントの教会と神学教育の独立性に固執した保守的ルター派でもなく、帝国の人倫の基盤となるべきルター派という国家宗教を構想する人々であった。つまりドルパットからやって来たハルナツクはこの時代の

宗派政治のコンテクストの中では伝統的な各ラントの教会に支持層を持たない神学者なのであり、必然的にそれ以外の支持母体の中で神学を営むことを迫られた神学者であった。

そのことは第一にハルナックがベルリン大学神学部⁽²⁵⁾の歴史神学の教授となる招聘人事は、当時のベルリンの福音主義教会協議会が否決したため、一旦白紙となり、それを当時の宰相オットー・フォン・ビスマルクが教会協議会と議会議事委員会の決定を飛び越えて、改めてハルナックを任命するということによって可能となったことから明らかである。第二に、ハルナックは実際には神学部の中で活動したというよりは、ベルリン大学、あるいはベルリンの王立アカデミーを舞台として活躍した神学者であったと言つてよい。ハルナックの業績を高く評価し続けたのは、教会ではなく、たとえば古代ローマの研究で有名なテオドール・モムゼンであり、また彼の名を世界に知らしめることとなった『キリスト教の本質』は神学部の講義ではなく、彼が大学の学部の枠を越えて行つた神学部の教授会の決定ではなく、大学評議会の決定による講義がもたなつてゐることからも、彼の神学の大学行政上のコンテクストが明らかになるであらう。

そのことは逆に見れば、プロイセンのルター派の支持がない以上、彼は教会の外に彼の神学者としての活動を支持する母体を、また読者を見出さねばならなかつたということなのである。それが彼へのラベリングとして今日に至るまで知られている「学問的神学」(wissenschaftliche Theologie)という立場の社会的・教会政治的なコンテクストである。それは彼の意図的な行動であるというよりは、この時代の教会政治の中で作り出された対立構図であつて、プロイセンではなく、ドイツの周辺小国からやつてきたハルナックにとっては「神学部の中で神学を営む神学者」である以外の道を彼の学問的なパフォーマン⁽²⁶⁾スとして選択することは困難であつた。

このような教会政治のコンテクストは第一にハルナックを宗派政治から切り離し、彼が神学を営む場所を大学やアカデミーの中に求めることになる要因となつたが、彼は同時にこの時代の制度としての教会、すなわち各ラントの事柄と

されていた伝統的な保守的ルター派の教会制度に不信感を抱くようになった。その結果彼はキリスト教それ自体や信仰を否定したり、疑うことは無かったが、彼はこの時代の教会という制度に疑問を持つ、「教会外のキリスト教」に接近することとなった。「教会外のキリスト教」とはこの時代の政治的、神学的コンテクストの中では啓蒙主義の影響を受けたキリスト教のことで、トゥルツ・レントルフが言うように、「宗教的であるが、教会的ではないキリスト教のこと」である。²⁷⁾

ハルナックが神学や教会制度への批判や疑念にもかかわらず、この「教会外のキリスト教」の立場に接近するだけで、明確にこの立場をとらなかつたのは、またその神学的傾向がほぼ一致しているのに「神学部外の神学」の立場を支持しなかつたのは、彼が宗教の場を、各ラントではなく、新しく生まれたライヒに見ていたからであり、ドイツ帝国における宗教の問題、すなわち国民教会に責任を持つ神学者でありたいと考えたからである。そこがプロイセン出身ではなく、周辺国家出身のハルナックが立ち得た唯一の小さな、狭い場所であつた。それが彼の学問的神学を生み出した場所だつたのである。またそれが彼の有名になつた『キリスト教世界』(Die christliche Welt) 誌上における「使徒信条論争」への介入の社会的コンテクストでもある。それがハルナックが立ち得る唯一の神学的な場であつた。

さらにハルナックはこの時代の保守的なドイツ・ルター派とは違つた意味でのナシヨナリストであつた。この時代のドイツ・ルター派は保守派もリベラルも新しく生まれたライヒへのナシヨナリズムという点では一致していた。ルターの宗教改革とルター派は新しく生まれたライヒのナシヨナル・アイデンティティーの要でもあつた。一七世紀のピューリタン革命ではなく、一八世紀のフランス革命でもなく、一六世紀のルターの宗教改革と「キリスト者の自由」の発見こそが、近代の始まりであるというのが遅れてきたドイツのナシヨナル・アイデンティティーとナシヨナリズムの要であつた。そしてそれが歴史家としてのハルナックの政治的アジェンダでもあつた。

しかしハルナックのナシヨナリズムは他のルター派のナシヨナリズムとは少し性格を異にしていたと言つてよいであ

ろう。それは「逆立ちしたナシヨナリズム」と言ってもよい。既に述べた通り、彼はエストニアという周辺小国の出身であり、プロイセン中心のルター派教会政治の中では周辺部に置かれていた。彼はとりわけ母方の家系から大國ドイツへの複雑な国民感情を持った自立心を受け継いでいた。そのことはハルナック自身が自覚する以上に、周囲の人々にとつてのハルナックの見方でもあつた。それ故にハルナックはドイツ帝國における神学者であるために、他のドイツ・ルター派の神学者以上にドイツ的であることを政治的には示す必要があつた。それは彼の経歴から来る周囲の疑念を払拭するためであり、彼自身の立場を明瞭にするためでもあつた。彼は誰よりも強くナシヨナリズムを提示すること、その立場を確立して行つたのである。それは周辺小國から中央の政治機關の頂点へと、ドイツ・ルター派のコンテクストとは別に駆け上つたハルナックの中にあつた「逆立ちしたナシヨナリズム」であつた。

この「逆立ちしたナシヨナリズム」、あるいは「過剰な」、「屈折した」、「ナシヨナリズム」はベルリン大学神学部教授としてのハルナックのアカデミック・キャリアを常に脅かすものであつた。既に述べた通り彼のベルリン大学神学部教授就任に際して、ベルリンの宗務局の反対を押し切つてこのポストを提供したのはビスマルクであつた。それは一八八八年のことであつたが、その二年後にビスマルクは宰相の職を解任されて⁽²⁸⁾いる。これはハルナックにとつて大きな危機であつた。この人事は、彼が保守派の、民族主義的なナシヨナリストたちから、リベラルなナシヨナリストたちによつて守られるということによつて成り立つていたのであり、その擁護者がビスマルクだったのである。それにもかかわらず彼はこの要職についた途端に、彼自身の保護者を失つたのである。その出来事が彼のその後の政治的な活動を規定することになった。彼は保守派のナシヨナリストを常に意識し、それに対して一定の配慮をした活動を余儀なくされたのである。それなしには彼は學術政治の世界で自らの立場を守ることができなかったのである。

ハルナックのドルパットからベルリンへの道程を、成功者の生涯として描き出すことは簡単であるが、そこにはプロイセン中心の帝國に対する周辺國家の批判者から帝國を支える神學の構築の必要性を考える神學者への複雑な轉換が

あつたことも見落としてはならない。それ故にハルナツクの皇帝の政策への支持には、明らかに両面があり、カール・バルトが単純化して見せたような帝国主義者、あるいは帝国の御用神学者という側面ばかりではない。彼は自分の信念、プロテスタント的な自由の精神こそ自由な個人と尊敬されるべき国家にとって益するものであり、そのために教会には神学が必要だとまさに政治的に考えていたのである。そしてその場合ハルナツクは帝国の状況と同時に、帝国周辺の小国の利益をも考えていたのである。ハルナツクはそのために学問と研究に励み、他方でこの課題のために政治的な手腕を発揮すること、そして中央の政策と結びつくことの必要性を感じ、また実行したのである。カール・バルトの判断の誤りは、彼が神学的リベリズムと政治的リベリズムとを単純に同一視しているところから来るのである。

今日の研究者が注意深く指摘している通り、ハルナツクの経歴の随所に見られる、政治的な衝突、彼が学問的なポジションを得る際に受けた不合理な排除は、彼がドルパットの出身であつたことと、そして彼の伝統的な制度としての教会への批判と無関係ではない。その中で彼は明らかに、政治の力学を知り、そして自らの政治的な立場を政治の中枢に得ることの必要性を確信していたのである。それ故に彼は一度もいずれかの政党に参加したこともなく、また何度要請されても議員になろうとしなかった。それはドルパット出身の政治的な神学者の注意深い保身術のひとつである。むしろハルナツクは政府や行政の責任者との協力の方が堅実な道だと考えたのである。そしてこの課題との取り組みの中で、彼はプロイセンの誰よりもプロイセン的である必要があつたと考えることは困難ではない。

第一次世界大戦の開戦における皇帝ヴィルヘルム二世の演説原稿をハルナツクが準備した際に彼が強調したことは「いかなる党派でもなく、ドイツのために」という政治的なスローガンであり、このスローガンはハルナツクが好んだものであり、彼が何度も行っている議会での開会の礼拝の説教にも登場するフレーズであり、彼がモムゼンとの書簡の中で強調することでもある。⁽²⁹⁾ドルパット出身のハルナツクにとつてはこのスローガンは政治的なスローガンである以前に、彼の実存的、あるいは民族的な問題だったのである。このスローガンのもとでこそプロイセンから見て周辺部に位

置づけられた少数民族はその立場を守り得たのである。

またハルナックはこの点でマルティン・ラーデとも意見の食い違いを見せており、ハルナック自身は自分が特定の分派的な立場にあるのだと見られることを避けようとしている。そしてむしろ、地域の特殊性や対立や排他的態度を排除した、統一されたライヒを彼は必要とし、そのための政策を確実なものとしてようと考えたのである。それは少数民族出身のハルナックにとつては、新しく生まれたライヒの中でぜひとも保持されねばならない原則であつた。彼は保守勢力のように、各ラントの特殊性や自立性を強調することはできなかったのである。むしろ彼にはライヒによる宗教行政の均一化が必要であつた。それが少数民族にとつて重要なことであつた。そしてこの周辺性と中央への固執が彼の神学の場となつた。そのような均一化を支えるライヒが、彼には必要であつた。それが彼のライヒへの忠誠と支持ということの意味なのである。

この点でハルナックのナシヨナリズムは「逆立ちしたナシヨナリズム」、あるいは「屈折したナシヨナリズム」と呼ぶべきであろう。プロイセンを中心としたルター派ナシヨナリズムの危険性を十分に知り、その立場からの排除を受けたハルナック、そしてプロイセンではないドイツの周辺部の帝国と深く結びついていたハルナックとしては、自分がどれだけ忠実なドイツ帝国の支持者であることを示すことは政治的に必要なことであつたのであり、彼はそのために誰よりも強いナシヨナル・アイデンティティーの形成論者、あるいはナシヨナリストとしての態度表明を求められたのである。それが、彼が生来のナシヨナリストではなく、「逆立ちしたナシヨナリスト」であるということの意味であり、彼の第一次世界大戦に関する政策の両義性の秘密、そしてビスマルクに対する両義的な対応の理由なのである。⁽³⁰⁾それ故に彼の政治的な立場を単純に神学的・政治的なリベリズムの立場のサンプルと見るような見方、彼を第一次世界大戦の戦争イデオログと見るような見方はいずれも正確な解釈とは言えない。彼のナシヨナリズムはむしろ両義的なものである。それ故に彼の政治的リベリズムは「逆立ちしたナシヨナリズム」によつて基礎づけられていた、という意味で

「リベラル」な「逆立ちしたナシヨナリスト」とハルナックは呼ばれるべきであろう。

ヴェーバーはこのようなハルナックの微妙な立場を、従兄弟で、キールの実践神学者であったオットー・バウムガルテンを通して知らされていたし、ルター派の福音主義社会協議会での交流を通して実感していた。ヴェーバーは後に述べるようにこのようなハルナックの立場に対して、理解はできても、批判的であった。それはハルナックのルター解釈への批判というよりは、むしろハルナックのいわば「逆立ちしたナシヨナリズム」に対する批判であったと言つてよい。それは既に引用した『キリスト教の本質』の文章に表れ出たような学問的なコンテクスからは切り離され、突然表れ出ているハルナックの政治神学的な立場への疑念であつた。

3. 同志である二人のリベラル・ナシヨナリスト、あるいは二人の政治的距離

それではマックス・ヴェーバーはこの時代のドイツ・ナシヨナリズムとどのような関係にあつたのであろうか。ヴェーバーがこの時代のドイツのナシヨナリズムから自立していたと考えることはできないし、むしろ彼はハルナックのような逆立ちしたナシヨナリストが気になるほどのナシヨナリストであつたのである。問題はここである。「ナシヨナリズム」が何を指しているかということであり、ナシヨナリズムの性格や質の問題である。そうであるなら、あのヴェーバーからハルナックに宛てた手紙は、単純にヴェーバーがドイツ・ルター派の教會的保守主義に対してアングロ・サクソン世界を肯定しているとか、ハルナックをドイツ・ルター派の代表者に仕立て上げ、ヴェーバーをアングロ・サクソン世界の理解者と位置づけるだけで正しく理解したことにはならないのではないだろうか。もちろんモムゼンもそのような単純化をはかつたと言ふことはできない。むしろヴェーバーのナシヨナリズムの性格を見極め、ハル

ナツクのそれとの違いを明らかにしなければならない。この問題を考えるために、次にヴェーバーのナシヨナリズムについて考えてみたい。

ヴェーバーとハルナツクとの関係においてドイツ・ルター派の神学者ハルナツクをドイツ・ナシヨナリズムの代表的な立場としてあげて、ヴェーバーを西欧型リベラル・デモクラシーの擁護者に仕立て、あの手紙を引用するという図式化は、一九七〇年代・八〇年代に流行したいわゆる「ドイツ特有の道」という議論の枠組みの援用に基づくものではないだろうか。「ドイツ特有の道」という考え方は、さまざまなバリエーションがあるにしても、ドイツにおいては、いわゆる狭義の西欧諸国 (Westeuropa) とは違って、ナシヨナリズムとリベラル・デモクラシーが結びつくことなく、ドイツのナシヨナリズムは、リベラル・デモクラシーを担う力にはならず、むしろそれと敵対する勢力になってしまったという見方である。つまりリベラル・デモクラシーと密接な関係にある西欧型ナシヨナリズムは、ドイツのナシヨナリズムと対立するということになるのである。アングロ・サクソンやフランス、オランダのナシヨナリズムは市民によつて担われた合理主義的、個人主義的なナシヨナリズムであるが、ドイツのそれは「民族 (Volk)」を基盤とする非合理主義的、集団主義的なナシヨナリズムと言われるわけである。このような図式化の中ではヴェーバーはどこに位置づけられるのであろうか。彼はここで言う所の非西欧タイプのナシヨナリズムのドイツの中で、リベラル・デモクラシーの意味を理解する、その擁護者であつたのであろうか。

他方でこのような図式化は、ヴィルヘルム帝政期のドイツ・ルター派のナシヨナリズムの問題を考える場合にはあまりにも事情を簡略化させてしまっている可能性がある。なぜならこの時代のルター派のナシヨナリズムは、統一の要としてのルターとその宗教改革によつて近代化を、また近代的自由をヨーロッパにおいてはじめて経験したドイツという政治神学を構築することによつて作り上げた神学者と、新しく生まれた第二帝国における教会制度を各ラントではなく、ライヒで統一的に取り扱うことを求めた神学者たちの異なつた二つの陣営によつて担われていたからである。そし

てこれらの神学者はいずれも教会制度の問題は伝統的には各ラントが取り扱うべきだという保守派に対して、そのような伝統を否定するリベラルな神学者と呼ばれたのである。つまりこの時代のルター派ナシヨナリズムの担い手はこのリベラル・ナシヨナリストであつた。

保守派は、当初、各ラントの伝統の重要性を主張するために、リベラル派が描き出す「ドイツ」という構想に警戒心を持ち、そして拒否し続けたのである。この保守派の論敵が皇帝の宗教政策を推進するハルナックであり、彼はそれ故にプロイセンの保守的ルター派には受け入れられないのである。彼はいつでもドルパットからやってきたよ、そ者であつた。だからこそ、ラントの教会に政治的、教会的基盤がないので、彼が教会や神学、政治において影響力を行使するためには、ライヒとしてのドイツの教会に基盤を置くしかなかったのである。そこにハルナックの政治的基盤があつた。その点ではヴェーバーがそのように明言していないのに、ハルナックをアンシュタルト化したドイツ・ルター派の代表のように位置づけ、ヴェーバーをアングロ・サクソンのリベラル・デモクラシーの擁護者のように考えて両者を対立させる図式化は、あまりにも現実からかけ離れた単純化された図式と言わざるを得ない。

事実、ヴェーバーは自分の宗教的な立場を明言したり、また特定の教会への帰属意識を表明したこともないであろうが、ドイツ・ルター派内部のいくつかの論争においては、明らかにルター派のリベラル・ナシヨナリストたちの側に立ち、講演し、また論陣を張っているのである。その際は彼も他でもない、ナシヨナリズムの問題においてハルナックに協調しているのである。そのことはあまり知られていない。

一度はハルナックが福音主義社会協議会の議長であつた時、そのもとで事務局長をしていたヴェーバーの友人パウエル・ゲレが、アウグスト・ヘルマン・クレマーと論争になった時に、ゲレとハルナックの立場を彼は擁護する論文を書いている。⁽³¹⁾ もう一度は、直接ハルナックのリベラリズムに関わる問題で、ハルナックが中心になって起草した福音主義教会最高宗務会議への新しく作られた礼拜式文案における使徒信条使用に関する嘆願書であり、ヴェーバーはこ

の嘆願書の共同提出者となった⁽³²⁾。つまりハルナックとヴェーバーのナショナリズムを媒介としたリベラリズムとは政治的利害が一致する部分のほうが多かったのである。

いずれもライヒという視点からハルナックがルター派内の政策に関与した際に生じた保守派の反対に対してヴェーバーが彼の立場を擁護したケースである。つまりヴェーバーはハルナックのナショナリズムであるリベラル・ナショナリストとしての立場には反対していないし、その点では両者は協力することが出来ているのである。ヴェーバーにとって、ハルナックはアンシュタルト化したドイツ・ルター派の代表ではないのである。

それではハルナックとヴェーバーのナショナリズムとを区別する要素は何であろうか。既に述べた通りドルパットというドイツの周辺部からやって来て、ドルパットの貴族社会とつながり、家庭ではロシア語さえ話したハルナックにとっては、プロイセンの教会と政治との中枢に駆け上るために必要であったのは誰にも負けない過度なナショナリズムであり、保守派のように各ラントに支持基盤を持ち得ない彼にとつてはライヒという枠組みが常に彼の神学と政治的立場とを支えていたのである。それが彼のリベラル・ナショナリズムの *Sitz im Leben* であり、それは逆立ちした、裏返されたナショナリズムであつた。それに対して、ヴェーバーのナショナリズムは、その時代のドイツのナショナリズムがリベラル・デモクラシーと結びつかかなかつた中で、国民自由党の代議士の息子であり、福音主義社会同盟ではアドフル・シュテッカーなどの保守派に對して、労働者と市民階級の自立のために奮闘し、戦後もフリードリヒ・ナウマンのドイツ民主党を支持するようなものであつた。確かにヴェーバーはこの時代の例外的な存在であつた。とりわけあの手紙が書かれた一九〇〇年前後、シカゴから戻つたばかりのヴェーバーのアングロ・サクソン世界、とりわけアメリカへの高い評価は、マリアンネの伝記からも伝え知ることができる。しかしこの点でヴェーバーはハルナックと「政治的利害」という点においては対立してはいないのである。つまりヴェーバーもまたハルナック同じように保守派の、いわゆる右のナショナリズムを批判しているのである。この点はこれまでも指摘されてきた点である。

しかしヴェーバーの研究者たちが指摘するように、ヴェーバーの場合にはこの西に向かつてのナショナリズム、すなわちリベラル・デモクラシーと結びつく西欧型ナショナリズムへの親近感と擁護だけではなく、彼のポーランド問題、ロシアに対する見解に現れ出るような東側に向けてのナショナリズムとその質をも検討してみなければならない⁽³³⁾。すなわち、西欧の文化価値への共感や親近感ではない、ドイツの東側の諸民族の動向への排他的、文化論的な政策の中に見出される、国家意識・民族意識に基づくナショナリズムである。この東へのナショナリズムはドルパット出身のハルナックにはないものである。

そしてこの点でハルナックとヴェーバーとの間には大きな溝があり、ハルナックからラーデへの手紙にしばしば見られるように、ハルナックが「あなたの『キリスト教世界』の執筆者ヴェーバー教授に対して感じる不安」と書き送るような政治的・実存的不安がそこに見られるのである。ハルナックはヴェーバーも出席した一九〇四年のシカゴへの旅行から戻った後に、アメリカの感想をやはりラーデに書き送っている⁽³⁴⁾。その中でハルナックは自らの感想と共に、後にはヴェーバーが『フランクフルト新聞』に書いたアメリカ報告への共感すら語っている⁽³⁵⁾。しかし同時にそのハルナックがこの時代にヴェーバーが他方でドイツの東側に向けて語る政策提言や政治的な評論には戸惑いを感じているのである。それは福音主義社会協議会がヴェーバーにポーランド系労働者の現地調査を依頼した時からハルナックが感じていたものである⁽³⁶⁾。もちろんこの不安については今日なお印刷されていないハルナックの書簡の解読と整理が必要であり、その整理が終わっていない現段階では全てを説明することができないので、ここで言及することは資料を超えて語ることになるので、これ以上は取り扱わない。

にもかかわらず、この点からハルナックとヴェーバーとの関係、あるいはハルナックへのヴェーバーの手紙の意図の枠組みは読み取り得る。東に向かつてのヴェーバーのナショナリズムは、ハルナックの逆立ちした、裏返し of 過度のナショナリズムというハルナックの政治的立場と対立している。またハルナックは常にヴェーバーが自分の政治的深層

を見抜いているという感じ、そのことを遠まわしにラーデに書き送っている。ハルナツクのヴェーバーへのあの「不安」はそこから来る。

しかし他方で、ヴェーバーはハルナツクがドイツ・ルター派保守派のナシヨナリズムの担い手ではなく、むしろその問題点をよく見ぬける立場にあつたことも知っているのである。だからこそ、ヴェーバーはあの手紙をハルナツクに送り、ハルナツクを西欧モデルのナシヨナリズムに対立する立場にまつり上げたのではなく、あなたはそのような立場にはないはずだ、というメッセージを送つたのである。それに対してもちろんハルナツクはその意図を正確に受け取り、驚き、彼の逆立ちしたナシヨナリズム、ナシヨナリズムという仮面の下にあるもうひとつのナシヨナリズムを暴露されることに不安を感じ、それ以後ヴェーバーと距離をとるようになったのである。それは各ラントの政治的、教会的利害と結びついていたドイツ・ルター派保守主義とは別に、ライヒという視点からドイツの政治と宗教との問題に関わつたリベラル・ナシヨナリストの正枢密顧問官でもあるハルナツクにとっては当然の判断であつたのではないだろうか。

注

(1) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の前半である第一章はヴェーバーがアメリカに出かける前に既に原稿が完成していたようであり、第二章は帰国後一九〇五年の初頭に執筆されたということになっている。

(2) ヴィルヘルム帝政期におけるハルナツクの政治的な役割については拙著『十九世紀のドイツ・プロテスタンティズム——ヴィルヘルム帝政期における神学の社会的機能についての研究』（教文館）の第六章を参照のこと。

- (2) Brief von Max Weber an Adolf Harnack, Heidelberg 5. Februar 1906, in: MWG II/5, 32-33, ㊦ Brief von Max Weber an Adolf Harnack, Heidelberg 12 Januar 1905 に ついて W. J. Mommsen, Max Weber: Gesellschaft, Politik und Geschichte, Frankfurt 1974, 113f. を参照のこと。この手紙はハレ・ヴィーテンベルク大学のハルナック研究室に複製がある。今日まで印刷されたことはない。

(4) 注3を参照のこと。引用はMWG II/5, 33

- (5) ところでこの旅行がヴェーバーに与えた影響についての研究は既に数多く見られ、それをここで改めて繰り返す必要はないであろう。よく知られているのは帰国後一九〇五年一月二〇日にハイデルベルクのホテル・タンホイザーで行われた「アメリカの夕べ」での発言であろう。この会はアドルフ・ダイスマンの主催で行われたもので、アメリカに招かれたヴェーバーやトレルチの報告を聞くために行われたのである。もともとW・シュルプターによればこの会合ではヴェーバーは正式な報告者ではなかったにもかかわらず、彼のアメリカ体験を雄弁に語ったという。それはひとことで言えばヴェーバーの「アングロ・アメリカ体験」、具体的には「ゼクテ体験」と言ってもよいかもしれない。それは肯定的なものであったのか、否定的なものであったのか、それを問うことは今は必要はない。ヴェーバー自身そのような単純な判断をしてはいないのである。セイント・ルイスでの講演でヴェーバーはドイツとアメリカの歴史的状況の違いを次のような有名なたとえをもって比較している。それは「武器でいつばいの世界の中にある武装キャンプで古いドイツ文化の輝きを維持するように強制する状態」と「そうした問題をまだ経験したことなく、おそらく今後もしやそうした問題にぶつかるとはしないであろう対立の領域的孤立状態」にあるアメリカとの違いである。そしてこれこそがアメリカのデモクラシーにとつての「真の歴史的刻印」であると見ている。(ヴェーバーのこの時のいわば予定外のアメリカ報告はM. Weber, Wirtschaft, Staat und Sozialpolitik: Schriften und Reden 1900-1912, hrsg. von Wolfgang Schluchter mit Zusammenarbeit von Peter Kurth und Birgit Morgenbrod, Tübingen 1998, 385ff. またシュルプターの解説は381-384 ㊦)

- (6) この時代のハルナックとヴェーバーとの関係や書簡の往復、直接的な対話の内容を知るために重要な資料はハルナックとマルティン・ラーデの往復書簡である。ハルナックはラーデへの手紙の中でヴェーバーについてかなり頻繁にふれている。Der Briefwechsel zwischen Adolf von Harnack und Martin Rade. Theologie auf dem öffentlichen Markt. Hrsg. und kommentiert von Johanna Jantsch, Berlin 1996.

- (7) 注5で掲げたマルティン・ラーデとの往復書簡集の編纂が終り、ようやく二〇一〇年になってアルブレヒト・リッチュルとハルナックと往復書簡の編集が完成し、出版される予定になっている。
- (8) Vgl. Karl Barth, Antwort auf Herrn Professor von Harnack offenen Brief, in: Die christliche Welt, 37 (1923), Nr. 16/17 (= Theologische Fragen und Antworten. Gesammelte Vorträge, Bd. 3 1957 (3. Aufl.)) また拙著『ハルナックと彼の時代』(キリスト新聞社)と『十九世紀のドイツ・プロテスタンティズム——ヴィルヘルム帝政期における神学の社会的機能についての研究』(教文館)を参照のこと。
- (9) Vgl. Gangolf Hübinger, Max Webers „Protestantische Ethik“ in der protestantischen Erinnerungskultur, in: Mitteilungen der Ernst-Troeltsch-Gesellschaft, 20/21 (2007/08), 24ff; Wolfgang Schulcher und Friedrich Wilhelm Graf, Asketischer Protestantismus und der ‚Geist‘ des modernen Kapitalismus, Tübingen 2005
- (10) そのような中で例外的な研究として Gangolf Hübinger, Kulturprotestantismus und Politik: Zum Verhältnis von Liberalismus und Politismus im wilhelminischen Deutschland. Tübingen 1994; ders.: Max Webers „Protestantische Ethik“ in der protestantischen Erinnerungskultur, in: Mitteilungen der Ernst-Troeltsch-Gesellschaft, hrsg. von F. W. Graf, Bd. 20/21, München 2008, 24-41
- (11) Vgl. Marianne Weber, Lebernerinnerungen, Bremen 1948, 359 マリア・ヘネは次のように書いている。「資本主義の〈精神〉についての論文は今や急速に完成に向かっていった。〔一九〇三年〕三月の終り、三箇月足らずの労苦の後に第二部は仕上がった。」(邦訳二七一頁、「」内は引用者の説明的挿入)
- (12) ヴェーバーのアメリカ旅行は一九〇四年八月二二日にハンブルクを出発して一二月二日に帰国している。ちなみにハルナックは同年七月五日に出発して、一〇月三日に帰国している。
- (13) Trutz Rendtorff, „Immer Gültiges in geschichtlich wechselnden Formen.“ Einleitung zu Hrnacks „Wesen des Christentums,“ in: Adolf von Harnack, Das Wesen des Christentums, Gütersloh 2001, 257
- (14) Adolf von Harnack, Das Wesen des Christentums, hrsg. Claus-Dieter Osthöver, Tübingen 2007 (2. Aufl.), 158
- (15) Vgl. Friedhilde Krause, Menschen, Bücher und Bibliotheken. Adolf von Harnack und seine Familie in: Marginalien. Zeitschrift für Buchkunst und Bibliophilie 170 (2003), 26-43, 171 (2003) 3-21

- (16) Vgl. H. Cymorek, F. W. Graf, Zwei unbekannte Texte Agnes von Zahn-Harnacks über ihren Vater, in: Mitteilungen der Ernst-Troeltsch-Gesellschaft 17 (2004), 83-94
- (17) アナトール・ハルナックの文獻を参照のこと。Volker Drehsen, Konfessionalistische Kirchentheologie, Theodosius Harnack (1816-1889), in: Profile des neuzeitlichen Protestantismus. Bd.2, Kaiserreich Teil 1. (hrsg.) F. W. Graf, Gütersloh 1992
- (18) Vgl. Hacik Rafi Gazer, Adolf von Harnack und die Armenier. Betrachtungen zu einem wissenschaftlichen Austausch um die Jahrhundertwende, in: Meine Pehlivanian (hrsg.), Armenien syn die menschen genant. Eine Kulturbegegnung in der Staatsbibliothek, Berlin 2000, 173-200
- (19) ハルナックの著作文獻目錄については、Friedrich Smend, Adolf von Harnack. Verzeichnis seiner Schriften bis 1930. Mit einem Geleitwort und bibliographischen Nachträgen bis 1985 von Jürgen Dummer, Leipzig 1990 を参照のこと。
- (20) Paul Tillich, Adolf von Harnack. Ein Würdigung anlässlich seines Todes, in: Gesammelte Werke, Bd. XII, Berlin 1971, 85
- (21) Trutz Rendtorff, „Immer Gültiges in geschichtlich wechselnden Formen,“ Einleitung zu Hrnacks „Wesen des Christentums,“ in: Adolf von Harnack, Das Wesen des Christentums, Gütersloh 2001, 28
- (22) Wolfgang Trillhaas, Geleitwort, in: Adolf von Harnack, Das Wesen des Christentums, Gütersloh 1973, 13
- (23) この点については W. Hartkopf und G. Wangermann (hsg.), Dokumente zur Geschichte der Berliner Akademie der Wissenschaften von 1700 bis 1990, Heidelberg 1991 に詳細な論述がある。
- (24) マックス・プランク研究所とハルナックとの関係については Jürgen Renn, Giuseppe Castagnetti, und Simone Rieger, Adolf von Harnack und Max Planck. Berlin: Max-Planck-Institute für Wissenschaftsgeschichte 1999 (= Preprint Max-Planck-Institute für Wissenschaftsgeschichte 113) を参照のこと。
- (25) この点については Adolf von Harnack. Wissenschaftspolitische Reden und Aufsätze. Zusammengestellt und herausgegeben von Bernhard Fabian, Hildesheim 2001 収録のハルナックの文部行政とアカデミーの議長としての仕事、また マックス・プランク研究所の運営、さらには神学部のある方に関する諸論文を参照のこと。
- (26) この点については Stefan Rebenich, Theodor Mommsen und Adolf Harnack. Wissenschaft und Politik im Berlin des ausgehenden

19. Jahrhunderts. Mit einem Anhang: Edition und Kommentierung des Briefwechsels, Berlin 1997 や参照のページ。
- (27) Trutz Rendtorff, Adolf von Harnack und die Theologie. Vermittlung zwischen Religionskultur und Wissenschaftskultur, in: K. Nowak/O. G. Oexle (hg.), aaO, 397ff.
- (28) ハンナ・グンター・ブラケルマン, Adolf Harnack als Spezialpolitiker, in: Evangelisch-Theologische Fakultät der Ruhr-Universität Bochum (hg.): Was ist Christentum? Versuche einer kritischen Annäherung. Eine Ringvorlesung, Waltrop 1997, 25-44 に詳し。
- (29) Vgl. Stefan Rebenich, Theodor Mommsen und Adolf Harnack. Wissenschaft und Politik im Berlin des ausgehenden 19. Jahrhunderts, Berlin 1997, 575-998, hier: 632
- (30) ハンナ・グンター・ノワック, Was ist eine Nation? Die Antworten Ernest Renans und Adolf von Harnacks, in: Rechtshistorisches Journal 20 (2001), 311-324; Wolfgang Nethöfel, Das Wesen des Christentums und seine ethische Orientierungsfunktion im Zeitalter der Globalisierung, in: Korsch/Richter (hg.), Das Wesen des Christentum, Marburg 2002, 111-124; Reinhart Staats, Der Hacik Raî Gazer. Der Briefwechsel zwischen Adolf von Harnack und Armenischen Theologen in: Martin Tamcke (hg.), Blicke gen Osten. Festschrift für Friedrich Heyer zum 95. Geburtstag. Münster 2004, 347-371
- (31) Max Weber, Zur Rechtfertigung Göhres, in: Die christliche Welt, Nr. 48 vom 24. November 1892, 1104-1109
- (32) Chronik der Christlichen Welt, Nr. 11 vom 15. März 1894, 82f. und Nr. 12 vom 22. März 1894, 89-92, Vgl. Brief Adolf von Harnacks an Martin Rade vom 29. Oktober 1893, in: Der Briefwechsel zwischen Adolf von Harnack und Martin Rade. Theologie auf dem öffentlichen Markt. Herausgegeben und kommentiert von Johanna Janitsch, Berlin 1996, 293
- (33) この点については今野元『バックス・ヴェーバーとポーランド問題 ヴィルヘルム期ドイツ・ナショナリズム研究序説』（東京大学出版会）を参照のページ。
- (34) Brief Adolf von Harnacks an Martin Rade vom 11. Oktober 1905, in: Der Briefwechsel zwischen Adolf von Harnack und Martin Rade. Theologie auf dem öffentlichen Markt. Herausgegeben und kommentiert von Johanna Janitsch, Berlin 1996, 293 ヴェーバーがあの手紙を書く前に訪ねたセイント・ルイスでの学術会議に、実はハルナックもヴェーバーと同様に招かれており彼は一九〇四年の夏から秋にかけて、同時期に三ヶ月にわたってアメリカを訪問しているのである。あの手紙はその時の

両者の共通の経験がもたっている。ヴェーバーは彼よりもアメリカの神学者や政治家との交流の経験が豊富なハルナックに、ルター精神と禁欲的プロテスタンティズムとの批判について問い合わせているのである。

ハルナックは実はこの時代もつともアメリカやイギリスとの直接的なコンタクトが多かったドイツの学者であった。彼は政府の要人として、また世界各国から訪ねてくる留学生との関係によつて、多くの国外の政治家や学者とのつながりを持っていた。また彼のいわゆるリベラリズムの神学は、その時代ドイツ最大の輸出品とさえ言われた。ドイツは政治的にも経済的にもリベラリズムの国ということはできず、むしろそれとは正反対の立場の国であると考えられていたが、神学だけはリベラリズムの先進国と考えられていたのである。

一九〇四年当時、ハルナックはアメリカでもつともよく知られた神学者であり、彼の書物はアメリカの多くの神学部の教科書であった。彼の主要な著作は主としてトーマス・ベイリー・サンダース (Thomas Bailey Saunders) によつて翻訳されており、さらに彼のもとで学位を得たり、留学して研鑽を積んだアメリカの歴史家の数は増える一方で、ウィリアム・アダマス・ブラウン (William Adams Brown) 、ヘンリー・ジョエル・シャーベリー (Henry Joel Cadbury) 、エドガー・ジョンソン・グッドスピード (Edgar J. Goodspeed) 、アーサー・クシュマン・マギファート (Arthur C. McGiffert) 、エドワード・コールドウェル・ムーア (Edward C. Moore) 、ジェームズ・ハーディー・ロウプス (James H. Ropes) などがよく知られているが、いずれもアメリカで成功した歴史家、聖書学者たちである。

ハルナックも一九〇四年のセイント・ルイスでの学術会議に招かれたのであるが、彼の招待はヴェーバーやトレルチとはその意味づけが異なっていた。彼は学術会議にドイツの学問世界を代表して招かれていたと言つてよい。ハルナックのアメリカ滞在中はドイツ公使と、アメリカ内務省から派遣された世話役二人も行動している。マリアンネ・ヴェーバーが書いている通り、ハルナックの講演には、ヴェーバーの時よりもはるかに多い聴衆が集まっている。そこでハルナックは九月二四日に「教会史と一般史との関係」という英語の講演を行っている。この講演を聴いた聴衆のひとりが当時ハーバード大学にいた哲学者であり、心理学者であるウィリアム・ジェームズであり、彼は多くの人々がそこに集まり、熱心にこの講演から学ぼうとしていた様子を知らせている。

ハルナックはセント・ルイスだけではなく、その後三ヶ月間にわたつてアメリカ各地を訪問している。シカゴ、ボストン、ニューヨークそしてニューヘブンを訪ねている。それはハーバード大学の心理学教授ヒューゴ・ミンスターベルク

のコーディネートによるものであった。ミュンスタールはこの訪米の前にも、そして後にも何度もハルナックをアメリカの招聘しようと努力した人物で、一九〇四年の訪米の際には進んで案内役を引き受けたのである。そしてこの旅行の最後にハルナックは、ドイツの正枢密顧問官としてワシントンのホワイトハウスに招かれ、当時のアメリカ大統領テオドール・ルーズヴェルトと約二時間にわたって会談している。その中でハルナックはベルリン大学とアメリカの大学の諸教授たちの交換研修制度についての支持を取り付け、またドイツの研究者たちの書物がアメリカで翻訳される際にドイツの側の学者が受ける不利益については正のための助けを要請した。それだけではなく、ドイツとアメリカにおけるキリスト教の意味について、またキリスト教的な労働者運動とドイツの福音主義社会協議会が社会にどのような影響をもたらしているのかについて率直に意見の交換をした。その意味ではドイツ帝国の正枢密顧問官であったハルナックのアメリカ訪問はトレルチやヴェーバーの場合とは違って公式のものであった。

後にこの三ヶ月のアメリカ訪問については彼の娘のアグネス・フォン・ツァーン＝ハルナックがいくつかの思い出を書き残しているが、ハルナック自身帰国後、彼の同僚たちにその印象を書き送っている。たとえばハルナックは一九〇四年の一月九日にマルティン・ラーデに次のように書き送っている。「私は日曜日の午後、素晴らしい、そして大変意味深い、生き生きとした印象を獲た旅行から帰国しました。このことについて私はぜひあなたにお話したいのです。しかし一週間間にもわたる仕事の中断のことも心配ですが。」またほぼ同じ頃に同僚のカール・ホルにも次のような手紙を書いている。「あなたもそう推測しておられるかも知れません。私は今回の旅行で、圧倒的で、驚くような、ヨーロッパでは経験できないような印象を得ました。資本主義のシステム、教会の組織、敬虔が政治に与える影響などです。そしてアメリカのドイツに対する尊敬、とりわけ大学についての尊敬ですが、その評価に相応しい内実と実像とを保持し続けねばなりません。」またハルナックは帰国後、大学行政の立場から、矢継ぎ早にアメリカの諸大学と教授交換制度、学生の留学にあたっての諸認定制度の整備などをプロイセンの文部省に指示している。他方でアメリカの大学における学問の商品化、「大学がひとつの企業になっていること」の問題点、さらにはプロテスタント諸教派がまるで「競技会場で勝利を得るために努力する姿」に批判的な報告も書いている。

さらに重要なことは、ハルナックがアメリカの国際政治における重要な立場を認識し、ドイツが今後イギリス（あるいはフランス）とロシアとの間で経済的にも政治的にも確固たる地位を確立するためには、アメリカと学問的なつながりの

みならず、政治的、経済的な密接な関係の樹立が不可欠であると指摘していることであろう。

ヴェーバーにとつてそうであったように、ハルナックにとつてもセイント・ルイスにはじまったアメリカ滞在は大きな意味を持っていたのである。

- (35) Der Briefwechsel zwischen Adolf von Harnack und Martin Rade. Theologie auf dem öffentlichen Markt. Herausgegeben und kommentiert von Johanna Jantsch, Berlin 1996, 47

- (36) この点については拙著『十九世紀のドイツ・プロテスタンティズム——ヴィルヘルム帝政期における神学の社会的機能についての研究』（教文館）を参照のこと。